

プロセスに目を向けると 農業は素晴らしい



大津 愛梨 (熊本県南阿蘇村)

「大学院まで行って何を言い出すか。今さら農業では食っていけないぞ。」私たち夫婦が就農すると言いだしたとき、意外にも後継者がいないことを憂っていた夫の祖父が最も反対した。パソコンを使った副業もあるから、と言っても、「そんな箱で金など稼げるもんか」と祖父。周囲の人たちも、私たちが本気なのかどうか、半信半疑だったようだ。

あれから四年。この選択は間違っていないなかったのだ、という満足感が今の私たちにある。あんなに反対していた祖父は、そしらぬ顔で「農業はいいだろう?」と自慢気だ。

企業に就職したり公務員になったりした友人たちの方がよっぽど大変そう。残業で家に帰れない。上司とうまくいかない。通勤ラッシュにゆられる毎日…。農業を選んだ私たちには、先輩はいても上司はいない。通勤もない。暑い日には昼からビールでそのあと昼寝。残業はない。

そんな私たちを見て、同世代の友人達は「いいなあ」とうらやましが。一方、私たちの両親世代は、「農業で大丈夫?」と不安がる。こ

の差は一体なんだろうか。

最近になって漠然と見え始めてきたことがある。それは、「結果」か「プロセス(過程)」かの違い。結果を出すために猛烈に働いた両親世代のおかげで、私たちは便利な生活ができるようになった。でも、結局はこの不況。「それなら人生そのものをもっと楽しんだ方がいいんじゃないかな?」不況のさなかに成人を迎えた私たち世代がそんな発想になるのは、不自然なことではないだろう。「結果」に気をとられると、農業は割に合わない。しかし「プロセス」に目を向けると、農業は素晴らしい。自然の中で働くことの幸せ。家族とたくさん一緒に過ごせる幸せ。結果を求めないわけではないが、結果が全てでもない。だから意識的にプロセスを楽しむながら農業をしたい。「いいなあ」とうらやましがる友人達に「いいでしょ」と胸を張って言い続けることができるように。

自信を持って農業を続けるためにも一つ、いつかは実現したいことがある。それはエネルギー資源の生産。ドイツに留学中、「我々は食料

だけでなくエネルギー資源も作っているんだ」と農家の方が誇らしげに言っていたのが印象的だった。

日本の減反政策と同じく、ヨーロッパも穀物の生産過剰を抑えるための休耕地政策を行っている。しかし、エネルギー用の作物なら作ってもよい。特にナタネ油から作るBDF(バイオディーゼルフューエル)は、軽油の代替燃料として人気が高まっているため、安定した価格で出荷できるのだそう。BDFは農地さえあれば再生可能である上、環境にもやさしい。お米からガソリンの代替燃料を作れることもできる。澱粉を使えば生分解性プラスチックの原料にもなる。農地で再生可能な資源を作ることができれば、日本は資源の豊かな国になる。それが農家の収入につながるれば、なおいのになあ!



プロフィール
おおつ えり
情報学部を卒業後、ドイツのミュンヘン工科大学に進学。帰国後、夫の郷里である南阿蘇で就農。NPO法人九州バイオマストークラムの理事長も務める。

情報学部を卒業後、ドイツのミュンヘン工科大学に進学。帰国後、夫の郷里である南阿蘇で就農。NPO法人九州バイオマストークラムの理事長も務める。